

新たな価値を生む基盤
A foundation for generating new value

137年の時を経て、未来に紡ぐ ニッタグループ価値創造の軌跡。

先進技術を学んだ新田長次郎が大阪の地で創業し、日本初となる動力伝動用革ベルトの開発に成功。それは、日本が近代化の兆しを見せ始めた1885年のこと。ニッタ創業の歴史はここからはじまります。その後、改良を重ねることで製品は進化を遂げ、さらに時代の変遷とともにさまざまな技術や製品を創出し続けました。創業から現在に至るニッタグループのものづくりの原点、また成長の原動力となるものとは。歴史を紐解き、現在、そして未来へつながる価値創造の軌跡を辿ります。

Founder's
basic way of thinking

発明

世の役に立つ製品を
発明・開発して
世に送り出すこと

改良 円満

世に送り出した製品に
不断の改良を加え、
常に最良の製品を提供すること

良い仕事環境、
良い人間関係なくしては、
良い発明、
良い改良はできない

ものづくりで 世の役に立つ価値創造の原点、 創業者新田長次郎の挑戦。

創業者の新田長次郎は、松山で代々続く農家の次男として生まれました。当時は、長男は家を継ぎ、次男以下が労働力として家業に勤むことが世の習わしだった時代、親や長男からは「勉強等せずに働け」と容められたと言います。しかし長次郎は農業に従事するかたわら寺子屋で学び、算盤を習得しました。また福沢諭吉の「学問のすゝめ」に大いに感銘を受け、「次男であってもやりたいことを貫きたい」と独立の精神が芽生えました。20才を迎えた長次郎は家族の反対を押し切り、大阪へ働きに出ます。職を転々としながら厳しい生活を送る中、頼りにしていた郷里の知人からは助けが得られず、また、大阪では幾度となく人にだまされました。それでも長次郎はあきらめずに懸命に働き続けました。彼は生来の負けず嫌いで、反骨精神のある人物でした。そのため、人に裏切られ、だま

されても、強い意志で耐え続けることができました。「自分が人をだまさないければ、必ず人からだまされなくなる」と信じ続け、誠実に生きることを貫いたのです。

やがて、製革会社に入社し製革技術を習得した長次郎は、職長に任命されます。算盤ができ、また教育を受けた人と対等に話ができたためです。労働者の身分や階級が明確だった当時からすれば、画期的なことでした。長次郎は「教育の大切さ」をあらためて実感したのでした。これが後の「松山大学」の創設にもつながっています。その後独立して製革事業を始めました。しばらくすると製革の品質の高さが評判となり、海外製品に匹敵する高品質な産業用革ベルトの依頼が舞い込みました。これが日本初の動力伝動用革ベルトの誕生につながります。顧客ニーズに真摯に向きあい、懸命に研究を重ね、遂に開発に辿り着いたこの製品は、その後技術研鑽や品質の改良を重ね、海外に輸出されるまでになりました。

大阪での経験は独自の哲学を生み、長次郎は生涯にわたってその考えを貫きました。人に真摯に向き合う「誠意」や「敬意」、そして顧客の要望に応え、世の役に立つものを「開発」する、またそれに甘んじることなく「改良」を重ねて常に最善のものを追求し続けること。これらは今も、ニッタグループの理念や行動指針として大切に継承されています。



至誠の人 創業者 新田長次郎

1857(安政4)年5月～1936(昭和11)年7月
幕末から明治へと移りゆく激動の時代、「工業の発展こそ日本の生命線」と考えた新田長次郎は、大阪で工業用ベルト事業を開始。「日本にないものをわが手で」「技術の改善進歩は無限」「全員による数限りなく考えられる改善こそが大切」と、「発明」と「改良」を生涯探求し続け、また、伸びやかな意見交換を育む「円満」な社風を望みました。

時代の変化に対応し技術を進化させてきた歴史

